

41363

教科書文庫

4

810

31-1923

~~20000~~

~~26570~~

200030

2751

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

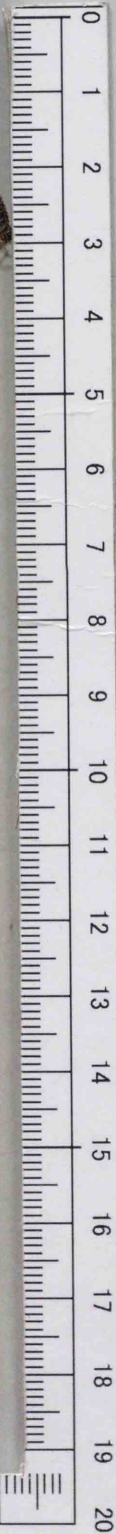


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759  
Mo4  
資料室

尋常  
小學

國語讀本 卷十二

文部省

初任郵 塚村五郎  
昭和六年十一月



資料室

375.7  
M01P



尋常  
小學

國

語

讀

本

卷十二

文  
部  
省

*I. Gauri*

*I. Gauri*

*I. Gauri*

*I. Gauri*

*I. Gauri*

*I. Gauri*

(74)

*I. Gauri*

*I. Gauri*

*I. Gauri*

*I. Gauri*

*I. Gauri*

*I. Gauri*

6

7



目録

第一課	明治天皇御製	一	第十五課	まぐる網	七十六
第二課	出雲大社	四	第十六課	鳴門	八十
第三課	チャールズ・ダーウィン	九	第十七課	間宮林藏	八十一
第四課	新聞	十四	第十八課	法律	八十八
第五課	蜜柑山	十九	第十九課	釋迦	九十
第六課	商業	二十二	第二十課	奈良	九十九
第七課	鎌倉	二十四	第二十一課	青の洞門	百三
第八課	ヨーロッパの旅	二十八	第二十二課	トマス・エヂソン	百十一
第九課	月光の曲	三十七	第二十三課	電氣の世の中	百十五
第十課	我が國の木材	四十五	第二十四課	舊師に呈す	百十九
第十一課	十和田湖	四十九	第二十五課	港入	百二十三
第十二課	小さなねぢ	五十二	第二十六課	勝安芳と西郷隆盛	百二十四
第十三課	國旗	六十	第二十七課	我が國民性の長所短所	百三十二
第十四課	リヤ王物語	六十五			



尋常 國語讀本卷十二

第一課 明治天皇御製

古のふみ見るたびに思ふかな

おのが治むる國はいかにと。

淺緑すみわたりたる大空の

ひろきをおのが心ともがな。

大空にそびえて見ゆるたかねにも、

第一課 明治天皇御製

明治十一年前後

國十二



民

明治五年

ほどくに心を盡くす國民の

ちからぞやがてわが力なる。

昇

日

明治五年

さし昇る朝日の如く、さわやかに

もたまほしきは心なりけり。

日

明治五年

よきを取りあしきを捨てて、とつ國に

おとらぬ國となすよしもがな。

邊

遠

明治五年

荒駒を馴らしがてらに、野邊遠く

櫻がりするますらをのとも。

夏

明治五年

つ方に志してか、日盛りの

やけたる道を蟻ありの行くらむ。

月

明治五年

はるぐと風のゆくへの見ゆるかな

すゝきがはらの秋の夜の月。



雲理松

海原はみどりに晴れて、濱松の

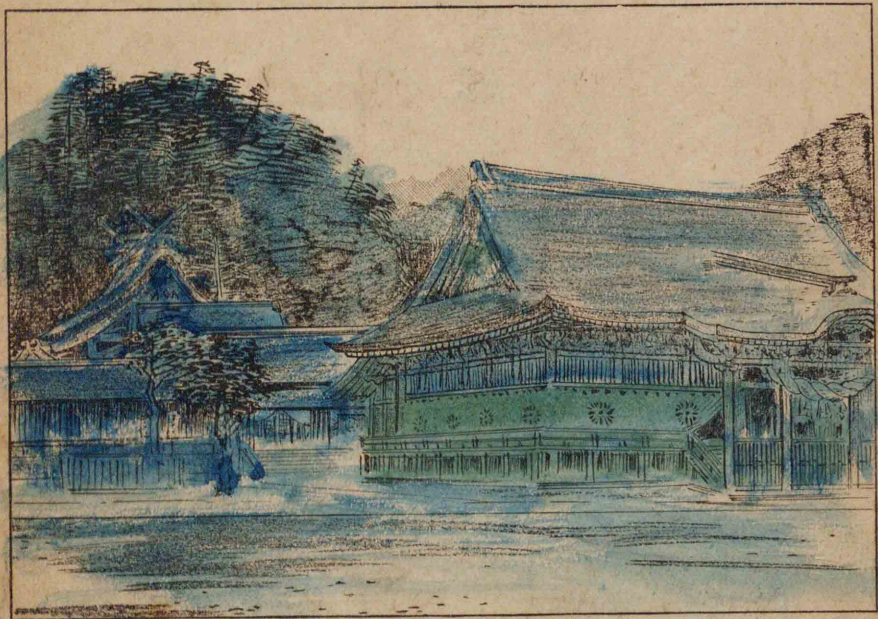
こずゑさやかにふれる白雪。

第二課 出雲大社

松江を發したる汽車は風光繪の如き宍道湖畔を走る  
こと約四十分、やがて新川を渡り更に進みて斐伊川の  
鐵橋にかゝる。傍なる人のいふやう、此の川は古の簸川  
にして、かのをろち退治の傳説あるは此の川の川上な  
りと。

今市を過ぎ、大社驛に着きぬ。停車場の外に出づれば、秋  
晴の空はあくまですみて、暖さ春の如し。旅行にはよき

國十二



日なりなど思ひつゝ、參詣  
人の群にまじりて行けば  
大鳥居あり巨人の如く我  
がゆくてに立つ。七十五尺  
の大鳥居とは、これなるべ  
し。  
やがて打續く松並木の間  
を過ぎて境内に入り、先づ  
拜殿の前にぬかつく。  
昔、大國主命みことを平げ民を



隣 孫 快

なつけて威勢四隣に並ぶものなし。時に天照大神の使者建御雷命たけみかぢ此の地に來りていふやう、

「大神の勅にいはいはく、あし此の葦原の中つ國は皇孫之をしらしめすべし」と。快く此の國をたてまつり給ふや如何に。

大國主命答へていはく、

「我もとよりいなみ奉る心なし。我が子事代主ことしろぬしとはかりて答へ申さん。」

此の時事代主命はすなどりのため美保崎みほのさきといふ處にありしが、使を得て急ぎ歸り、父君に申すやう、

厚

「かしこし。仰のまゝにたてまつり給へ。こゝにおいて大國主命、

「此の葦原の中つ國を皇孫にたてまつりて、とこしへに天つ日嗣あそを護りまつらん。」

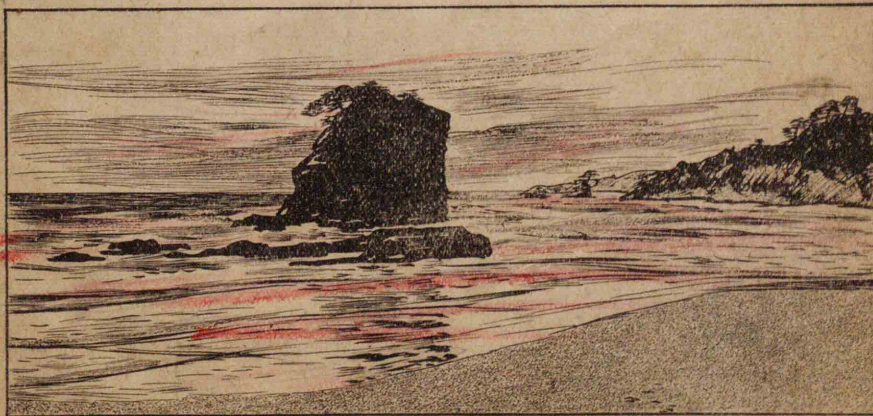
と申して恭しく國土をたてまつりぬ。大神其の真心の厚きを賞して、命の爲に壯大なる宮殿を造らしめ給ふ。これ即ち出雲大社の起原なり。

此の社は規模の大なるを以て世に知られ、本殿の如き其の高さ實に八十尺に及ぶ。千木のほとりを飛ぶ鳩はとの、さながら雀の如く見ゆるも、社殿の高大なる爲なるべ



し。

寶物殿に入りて拜觀するに、火きり  
ぎね火きりうすといふものあり。太  
さ中指ほどなる細長き棒と、幅四五  
寸長さ三尺ばかりの厚板となり。此  
の棒を此の板の上にてきりをもむ  
が如く廻せば、まさつ摩擦によりて火を生  
ず。此の社にては、今も太古の法に従  
ひ、之によりて火を作るといふ。  
境内を出でて海岸に到る。いなさ稻佐の濱



國十二

金色輝

鑛

といふ處なり。かの建御雷命が大國主命と會見せられ  
しは此處なりといふ。折から日は地平線に近づきて、雲  
も水も金色に輝き、美しさいふばかりなし。なぎさに立  
ちて昔をしのべば、そのかみ此處にいかめしく向ひあ  
ひけん英雄の姿、今まのあたり見るが如く、打寄する波  
の音さへ何事をか語るに似たり。

第三課 **チャールスダーウィン**

チャールスダーウィンは今から百年餘り前イギリスに生  
れた。ごく小さい時分から動植物に深い趣味を持ち、又  
物を集めることがすきて、貝殻がらや鑛石などを室内に並



叱 蟲

べては一人で楽しんでゐた。  
 九歳の時始めて學校にはいつたが、餘りすばしこい生  
 れつきでなかつたので、先生にもむしろ中以下の生徒  
 と思はれてゐた。又父には  
 「お前のやうに犬の世話やねずみを取ることにばか  
 り熱心では困るではないか。」  
 といつて叱られたことがあつた。  
 十歳の頃には昆虫採集を始めた。又いろくの鳥を注  
 意して見ると、それぐ違つた面白い習性をもつてゐ  
 るので、見れば見る程興味がわき、人はなぜみんな鳥類

國十二

逃



の研究をしないだらうと不思議に思ふやうになつた。  
 父はダーウインを醫者にしようと思つて大學へやつた。  
 温順な彼は父の命に従つて  
 勉強してゐたが、何時の間  
 か好きな博物學の研究が主  
 となつてしまつた。  
 此の頃のことであつた。或日  
 彼が古木の皮をむくと、珍し  
 い甲蟲が二匹ゐた。早速両手に一匹づつつかむと、又一  
 匹變つたのが見えた。これも逃しては大變といきなり

第三課 チャールズ・ダーウィン

十一



吐 辛  
吐 辛

探 揚  
探 揚

針  
針

右の手の蟲を口の中へ投込んだ。投込まれた蟲は苦し  
まぎれに恐しく辛い液を出したので、思はず吐出すと、  
蟲は得たりと逃げてしまった。此の時にはもう三番目  
の蟲はどこへ行つたかわからなかつた。

彼が探検船ビーグル號に乗込んで意氣揚々と本國を  
出發したのは、二十三歳の時である。かくて世界の各地  
をめぐるつて、歡喜の眼を輝かしながら、博物學や地質學  
の實地研究につとめ、種々の材料を集めて本國に歸つ  
たのはそれから五年の後である。此の航海によつて彼  
の博物學者としての基礎が十分に出來、一生の方針が

はつきりときまつた。

暇 暇  
保 保

ダーウィンは興味を覺えると、あくまでそれにこる性質  
で、一度何かをし始めたら、満足な結果を得るまでは決  
して途中でやめなかつた。しかも日常生活は極めて規  
則正しく、毎日きめた時間割通りに仕事を進めて、たと  
へ十分、十五分の餘暇でも無益に費すことがなかつた。  
ダーウィンの後半生は病氣がちであつたが、此の規則正  
しい生活とふだんの養生とによつて、七十四歳の長壽  
を保つことが出來た。さうして廣く動植物を研究して、  
生物は總べて長年月の間には次第に變化し、下等なも



のから高等なものへと進むものであるといふことを  
証明した。これが有名な進化論で、學界を根本から動か  
したものである。

第四課 新聞

速  
殊  
單  
純  
戲

世の出來事を速に知らんとするは人情の常なり。され  
ば珍しき事件の起りし時、之を記述して印刷に附し、廣  
く發賣することは古より行はれたりしが、印刷術の幼  
稚なる時代において、唯をりく興味ある特殊の事  
件を報道するに過ぎざりき。されど人智の進歩と印刷  
術の發達とは、何時までもかく單純にして遊戯的なる

現  
遂

ものに満足すべくもあらず、やがてあまねく内外の事  
件を報ずると共に時事を論ずるもの起りて、こゝに始  
めて我等の生活に切實なる關係を有するものとはな  
りぬ。我が國にてかゝる新聞の現れたるは維新前後に  
して、其の後數十年の間に驚くべき發達を遂げたり。  
勿論今日我が國にて發行せらるゝ新聞中にも大小種  
種ありて、一がいには言難けれども、相當に名ある新聞  
は、通信に印刷に、あらゆる文明の利器を用ふるを以て、  
今や遠くヨーロッパに起りし事件も僅か一兩日にして  
讀者に報道せらる。



販 司 統 達

然らばかくの如き新聞は如何にして編輯せられ印刷せられ、讀者に配布せらるゝか。先づ社の組織について述べん。これも社によりて多少の相違はあれども、多くは總務局ありて全體を統べ、編輯營業の二局ありて、編輯に關することは前者之を司どり、販賣廣告に關することは後者之を擔當す。しかして編輯局は更に編輯部政治部經濟部社會部通信部外報部學藝部寫真部校正部等に分れ、各部にそれぐ掛の記者又は技術家ありて、或は出でて材料を取り、或は社内に入りて編輯事務にたづさはる。此の外、國內各地

刷 | 繪

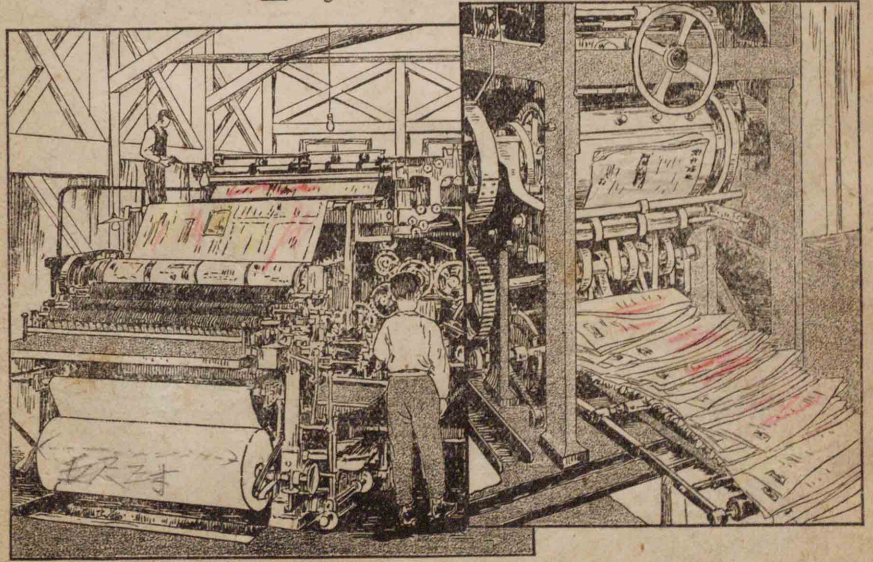
は勿論、世界各國主要の地に特派員又は通信員ありて、事件起れば直に電話又は電信にて通知し來る。さて編輯部にては刻々集り來る原稿を選擇整理し、繪畫寫真等と共に之を印刷部に送る。印刷部にては直に所要の活字を拾ひて之を組み、校正刷を刷りて校正部に廻す。校正終れば紙型に取り、更に之をもととして鉛版を造り、印刷機にかく。かくいへば、頗る繁雜にして多大の時間を要する如くなれども、原稿締切時刻より刷出まで其の間僅かに數十分、以て其の如何に速なるかを知るべし。殊に驚くべ



能

但

きは輪轉機の能力なり。卷取紙として幅三尺六寸、長さ二萬六千尺餘りのものを之に取りつくれば、機械は電力によりて働き、印刷も切斷も人手を要せず、一臺よく一分間に四百五十枚を印刷すといふ。かくて刷上りたる新聞は、直に販賣部を経て遠近に發送せらる。但し大新聞にありて



隔

は、比較的早く印刷したるものをば地方版として遠隔の地方へ送り、新しき事件ある毎に改版して、最後の最も新しきものを市内版とす。されば同一日附の同じ新聞にても、發行地にて受取るものと他地方にて受取るものとは、記事に多少の相違あるを常とす。

第五課 蜜柑山

沖を走るは丸屋の船か、

丸にやの字の帆が見える。

調子のよい蜜柑取歌がすみきつた晩秋の空氣をふるはして、何處からともなくのどかに聞えて来る。今登つ

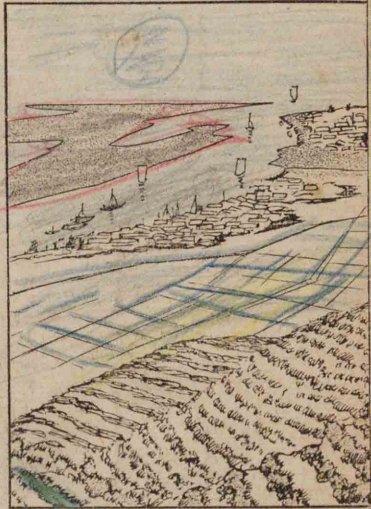


黄金



て来た方を振返つて見ると、幾段にも幾段にもきづき上げられた山畑には、蜜柑の木が行儀よく並んでゐる。どれを見ても、枝といふ枝にはもう黄金色に色づいた實が鈴なりになつてゐる。黒い程こい緑の葉の間から、其の一つくが日の色にはえてくつきりと浮出てゐるのが見える。

採



た二三人の男が、器用な手つきで蜜柑を採つてゐる。さつきの歌の主であらう。あちらでもこちらでも、さえたはさみの音がちよきんくと聞える。ふもとの川を白帆が二つ三つ通つて行く。あれは港の親船へ蜜柑を運んで行くのであらう。小春日和の暖さにとけて、其處からも夢のやうに船歌が聞えて来る。

日和



第六課 商業

敏 己堅 際 爲

商業は之に従事する商人だけを利するためのものではない。商人たる者はよく共同生活の眞意義を辨へ品質のよい品物をなるべく安價になるべく敏速に供給して、廣く公衆の爲を計らなければならぬ。これ即ち世間の信用を博して堅實に自己の事業を發展させる道である。

買ふ人の無智に乗じて安い品を高く賣付け、見本には精良な品を使つて、實際の注文に對しては粗惡なものを送るやうな事は、人として爲すべからざる事である。

永 影 振 個

又單に損益の點から見ても、かやうな仕方は唯一時の利益を得るに止つて、永續することが出来ないから、つまりは小利をむさぼつて大損を招く結果になる。

外國貿易に至つては、之に従事する者の心掛け如何の影響が更に大きい。即ち一人の貿易商が外人の信用を失ふやうな事をすれば、忽ち國全體の商品の信用に係して、貿易の不振を招き、國運の發展をもさまたげることになる。外國貿易業者はかへすく深く此の點に注意しなければならぬ。

昔は個人の利益を營むのが商業であると思はれてゐ



忍 賤 程 解 格 誤

た。それ故大多數の商人は、自己の利益を除いては、殆ど何物をも眼中に置かず、忍耐も努力も要するに皆自己の爲であつた。彼等が町人といつて賤しめられたのも、其の爲であらう。これはひつきやう文明の程度が低いために、共同生活の意義が明らかでなく、随つて商業の本質が理解されず、商人の人格が重んぜられなかつたからである。文明の進んだ今日尚此のやうな考を持つのは、大きな誤といはねばならぬ。

第七課 鎌倉

七里が濱のいそ傳ひ、

極 劔

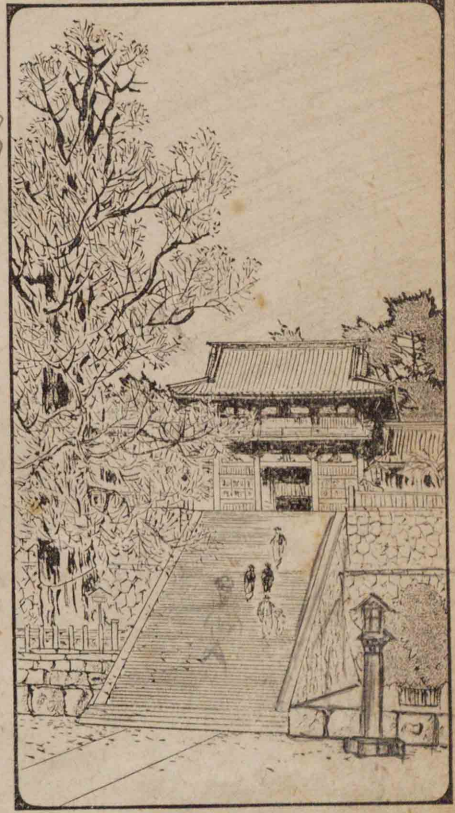
稻村崎名將の  
劔投せし古戰場。

極樂寺坂越え行けば、  
長谷觀音の堂近く、  
露坐の大佛  
おはします。

由比の濱邊を  
右に見て、







雪の下道  
過行けば、  
八幡宮まんの  
御やしる。

上るや石のきざはしの  
左に高き大いてふ、  
問はばや遠き世々の跡。

若宮堂の舞の袖、

しづのをだまきくりかへし  
かへしし人をしのびつゝ。

レヅヤレヅ、しづのをだまき  
さとりかへしむかしを今に  
おもよしもかな。

憤

鎌倉宮にまうてては、  
盡きせぬ親王のみうらみに、  
悲憤の涙わきぬべし。

歴史は長し  
七百年、  
興亡すべて





覺

ゆめに似て、

英雄墓は

こけむしぬ。

建長圓覺

古寺の

山門高き松風に、

昔の音やこもるらん。

第八課 ヨーロッパの旅

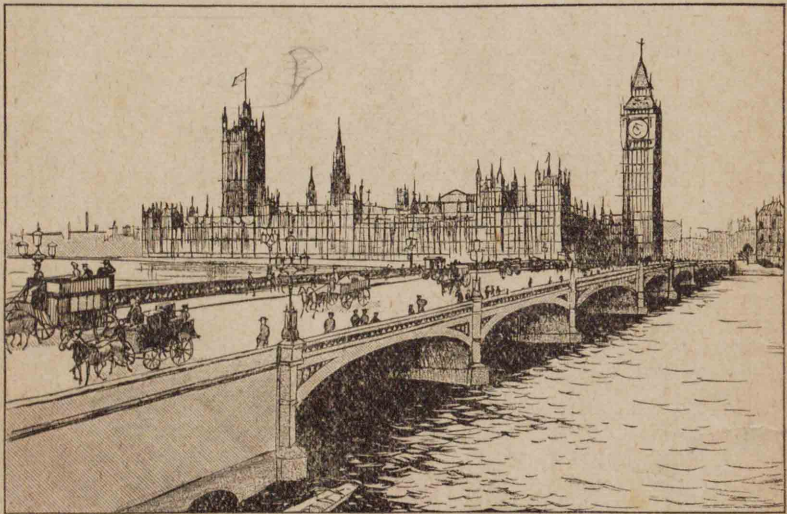
一 ロンドンから



圓覺寺山門

昨日大英博物館を一覽ちんしました。陳列品の多

外はありません。  
ロンドンは何と言つても世界の都會です。テムス川を飾るタワー橋、ロンドン橋を始め、國會議事堂、大英博物館、ウェストミンスター寺院、その他見る物聞く物唯々驚く外はありません。





混

種多様で、しかも其の數量の數限りもないのは、さすがに世界の**大博物館**といはれるだけあると思ひました。我が日本のよろひかぶと其の他の**武器類**もたくさん集めてあります。市街を見物して私の特に感心したのは、**市民が交通道德を重んずること**です。往來の**頻繁**な街、上でもよく**警官の指揮**に従つて、**混亂**することがなく、**地下鐵道乗合自動車**などの乗り下りにも、むやみに先を争ふやうなことはありません。

二 パリから

一昨日朝ロンドンを出發して午後早くパリに着きました。

此處はさすがに**藝術の都**として世界に聞えてゐるだけあつて、**建物なども一般に壯麗**です。

**世界最美の街路**といはれてゐる**シャンゼリゼ**の大通には、**五六層もある美しい建物**が道路の兩側に並び、**車道と人道との間には、緑したる街路樹**が目もはるかに連なつてゐま

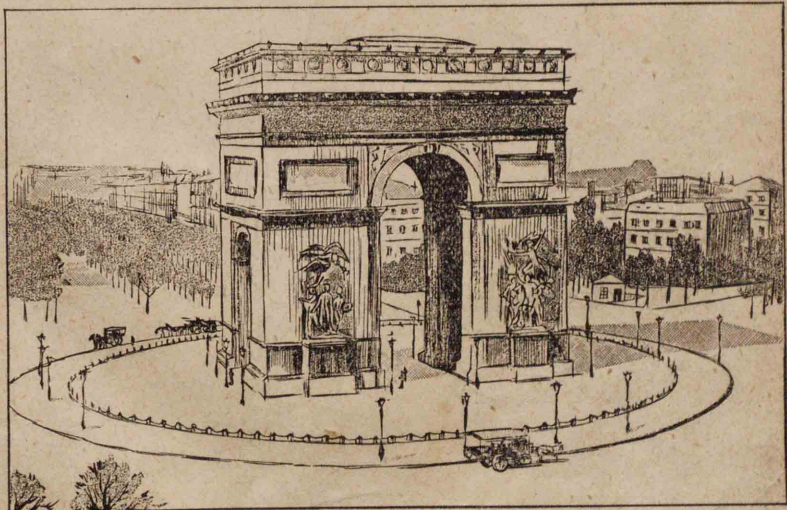
麗 藝 側



彫

す有名な凱旋門は此の大通の起點にあり  
ます。

ルーブル博物館も一覽しましたが、りつばな繪畫彫刻の多いことは恐らく世界第一であらうと思ひました。又エッフェル塔にも登つて見ました。此の塔は世界最高の建物で、高



國十二

眺眺

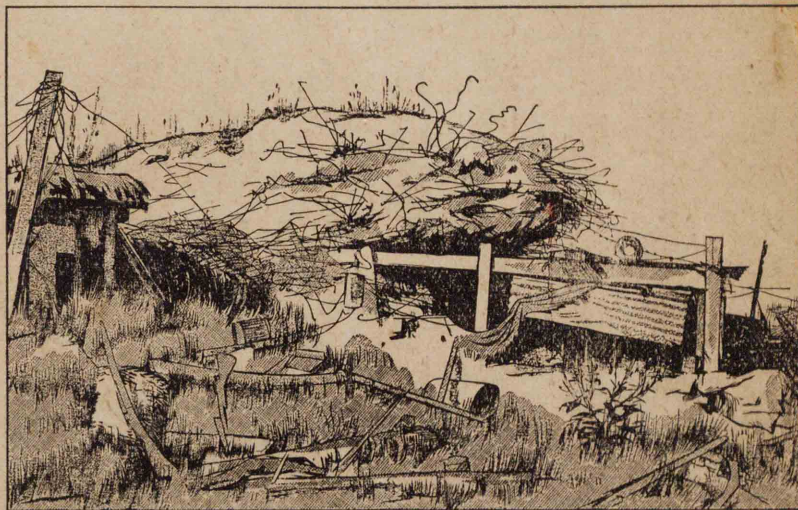
さが三百メートルもあるさうです。塔の中には賣店もあり、音楽堂、食堂なども設けられています。眺望臺で眺めると、道を往來してゐる人間や自動車などは、まるで蟻ありのはふやうに見えるし、さしもの大きなパリー市も殆ど一目に見えます。

三 ベルダンから

あゝ、此のむぎんな光景を御らんなさい。山も森も村も皆焼野が原と變つてゐます。私は今落日に對して、うすら寒い秋風を浴び



跡



は農夫が鋤を振るつてをり、又工場といふ工

ながら、山鳩ほととぎすの聲さびしきベルダンの戦跡に立つてゐます。

四 ベルリンから

汽車でドイツの国内にはいつたのは朝まだほの暗い頃でしたが、もう沿道の田畑に

儉

場には盛に黒煙が上つてゐました。これはイギリスやフランスなどでは見られぬ光景で、私は今更ながらドイツ人の勤勉けんべんなのに驚きました。やがてベルリンに入つて見ても、勤儉けんべんの美風が市民の間にあふれてゐて、彼等が大戦後における自國の疲弊ひへいを回復ひくふするため盛に活動してゐるのには全く敬服しました。

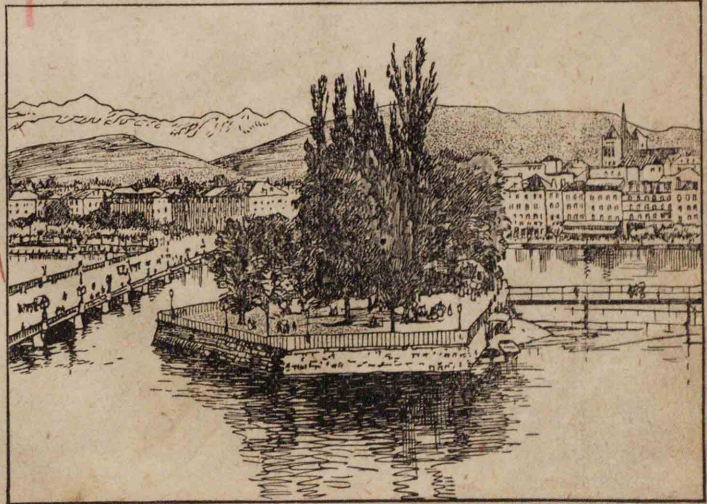
五 ジュネーブから

世界の公園といはれてゐるスイスは、到る處我が日本のやうに景色がよい。私は今ジュネー



青

ブ市のモンブラン橋のて  
 すりにもたれて、ジュネーブ  
 湖上の風光に見とれてゐ  
 ます。るり色の水に浮ぶル  
 ソー島、湖畔に連なる緑樹  
 白壁は、るかに紺青の空に  
 そびえて雪をいたゞくア  
 ルプの連峯。久しく單調平  
 凡な景色にあきてゐた私には、如何にも心地  
 よく眺められます。



友

第九課 月光の曲

三十三

ドイツの有名な音楽家ベートーベンがまだ若い時分  
 のことであつた。月のさえた冬の夜友人と二人町へ散  
 歩に出て、薄暗い小路を通り、或小さいみすばらしい家  
 の前まで来ると、中からピアノの音が聞える。

「あゝ、あれは僕の作つた曲だ。聴き給へ。なか／＼うま  
 いではないか。」

彼は突然かういつて足を止めた。  
 二人は戸外にたゞずんでしばらく耳をすましてゐた  
 が、やがてピアノの音がたと止んで、



演

「にいさん、まあ何といふよい曲なんでせう。私にはもうとてもひけません。ほんたうに一度でもよいから、演奏會演奏會へ行つて聴いてみたい。」

と、情ないやうにいつてゐるのは若い女の聲である。

「そんなことをいつたつて仕方がない。家賃さへも拂へない今の身の上ではないか。」

と兄の聲。

「はいつてみよう。さうして一曲ひいてやらう。」

ベートーベンは急に戸をあけてはいつて行つた。友人も續いてはいつた。

縫

免

薄暗いらふそくの火のもとで、色の青い元氣のなささうな若い男が靴を縫つてゐる。其のそばにある舊式のピアノによりかゝつてゐるのは妹であらう。二人は不意の來客にさも驚いたらしい様子。

「御免下さい。私は音楽家ですが、面白さについつり込まれて參りました。」

とベートーベンがいつた。妹の顔はさつと赤くなつた。兄はむつつりとしてやゝ當惑わくの體である。

ベートーベンも我ながら餘りだしぬけだと思つたらしく、口ごもりながら、



「實はその、今ちよつと門口で聞いたのですが、——あなたは演奏會へ行つてみたいとかいふお話でしたね。まあ一曲ひかせていたゞきませう。」

其の言方が如何にもをかしかつたので、言つた者も聞いた者も思はずにつこりした。

「有難うございます。しかし誠に粗末なピアノで、それに楽譜もございせんが。」

と兄がいふ。ベートーベンは、

「え、楽譜がない。それでどうして。」

といひさして、ふと見ると、かはいさうに妹はめくらで

ある。

「いや、これでたくさんです。」

異

といひながら、ベートーベンはピアノの前に腰を掛けて直にひき始めた。其の最初の一音が既にきやうだいの耳には不思議にひゞいた。ベートーベンの兩眼は異様に輝いて、彼の身には俄に何者かが乗移つたやう。一音は一音より妙を加へ神に入つて、何をひいてゐるか彼自らも覺えないやうである。きやうだいは唯うつとりとして感に打たれてゐる。ベートーベンの友人も全く我を忘れて、一同夢に夢見る心地。



折から燈がぱつと明るくなつたと思ふと、ゆらくくと動いて消えてしまつた。

ベートーベンはいく手を止めた。友人がそつと立つて窓の戸をあけると、清い月の光が流れるやうに入込んで、ピアノとひき手の顔を照らした。しかしベートーベンは唯だまつてうなだれてゐる。しばらくして兄は恐る恐る近寄つて、力のこもつた、しかも低い聲で、

「一體あなたはどういふ御方でございますか。」

「まあ待つて下さい。」

ベートーベンはかういつて、さつき娘がひいてゐた曲

を又ひき始めた。

「あゝ、あなたはベートーベン先生ですか。」

きやうだいは思はず叫んだ。

ひき終るとベートーベンは、つと立上つた。三人はどうかもう一曲としきりに頼んだ。彼は再びピアノの前に腰を下した。月は益さえわたつて来る。それでは此の月の光を題に一曲といつて、彼はしばらくすみきつた空を眺めてゐたが、やがて指がピアノの鍵（けん）にふれたと思ふと、やさしい沈んだ調は、ちやうど東の空に上る月が次第々々にやみの世界を照らすやう、一轉すると、今度

題



奇怪

は如何にもものすごい、いはば奇怪な物の精が寄集つて、夜の芝生しばふにをどるやう、最後は又急流の岩に激し、荒波の岸にくだけるやうな調に、三人の心はもう驚と感激で一ぱいになつて、唯ぼうつとして、ひき終つたのも氣附かぬくらゐ。

「さやうなら。」

ベートーベンベートーベンは立つて出かけた。

「先生、又お出で下さいませうか。」

さやうだいは口を揃へていつた。

「参りませう。」

揃

聲

ベートーベンベートーベンは、ちよつとふりかへつてめくらの娘を見た。

彼は急いで家に歸つた。さうして其の夜はまんじりともせず机に向つて、かの曲を譜に書きあげた。ベートーベンの「月光の曲」といつて、不朽きこくの名聲を博したのは此の曲である。

第十課 我が國の木材

我が國に産する木材は其の種類頗る多し。今其の主要なるものを擧ぐれば、杉ひのき檜ひのきもみつがみつがひばひば松かからまつ落葉松かからまつけやきけやき栗栗かしかしならならくぬぎくぬぎ等なり。



殖 柱 澤 香 憂 耐 築

凡そこれ等の木材は、其の有する性質によりて各種の用に供すべく、随つて何れも重要ならざるはなけれど、中にも其の用途の廣きは杉及び檜なり。殊に杉は人為によりて容易に増殖せらるゝ點において檜にまさり、其の需要の多きこと我が國の木材中第一位にあり。家屋、橋梁、船舶、電柱より桶たる曲物の類に至るまで、一として杉を用ひざるなし。然れども材の優良にして美麗なるは檜を以て第一とすべし。光澤と香氣とを有し、ねばり強くして、割れ、そる等の憂極めて少く、又よく濕氣に耐ふるが故に、建築材として最も重んぜらる。唯杉に

縮 柔 久 具

比して産額少く、増殖やゝ困難なるは惜しむべし。もみつがは共にそり又は伸び縮みすること著しきを以て、杉檜に比すれば用途甚だ狭し。されど何れも美しき光澤を有するが上にもみは柔かにして工作に便なれば、諸種の箱を作るに用ひられ、つがは堅くして久しきに耐ふるが故に、家屋の柱、土臺となすに宜し。ひばは松、落葉松は何れも堅くして、耐久耐濕の性あるを以て、建築土木造船等其の用途頗る廣し。ひばは抵抗力を有し、松は弾力に富み、落葉松は一種の品位を有する等、各其の特性を具へたり。



磨 珍 裝

けやき、栗、かしは何れも甚だ堅く、もくめこまやかなり。中にもけやきはもくめ美しく、磨けば美麗なる光澤を生じ、又くるひ少きが故に裝飾材として珍重せられ、栗は耐久耐濕の性殊に著しきを以て、家屋の土臺、鐵道のまくら木等の用に供せられ、かしは最も堅くして彈力に富むが故に、櫓車運動器具の如き強烈なる力を受くるものを製作するに適せり。かしは又ならくぬぎと共に薪炭材として重要なるものなり。

杉は吉野杉、秋田杉を以て第一とし、檜は木曾産の聲譽

著

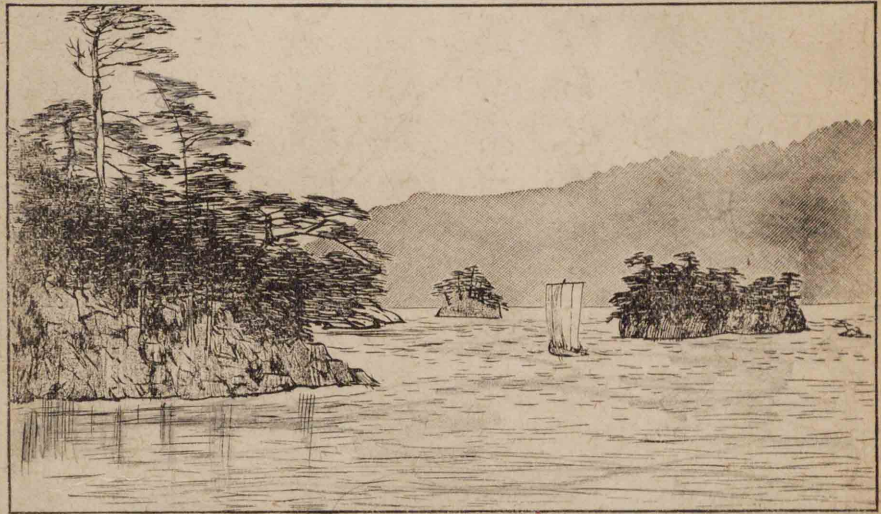
高く近時臺灣阿里山の檜また有名なり。ひばは津輕半島に最も多く産す。松に至りては産地極めて廣くして、奥羽地方より九州に至るまで殆ど之を見ざる處なく、其の豊富なること我が國の木材中の首位を占む。中にも南部松日向松は良材として最も世に著る。

第十一課 十和田湖

十和田湖は一部分秋田縣鹿角郡に屬し、其餘は青森縣上北郡に屬してゐる。此の邊は一體に山地で、湖面は海面より四百メートルも高く、其の面積は約六十方キロメートルある。



複



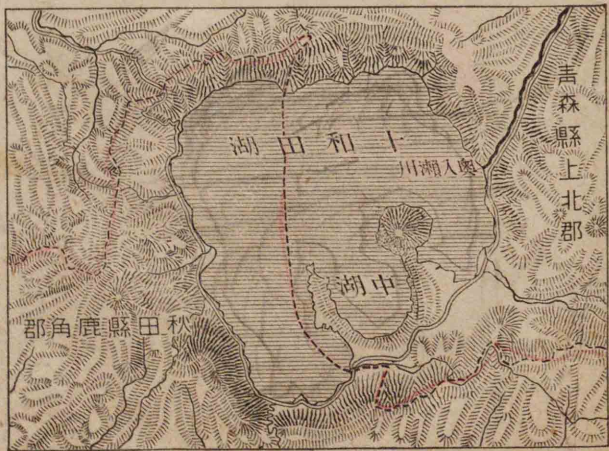
湖岸線は大體單調であるが、東南岸だけは二つの半島が並んで突出してゐるためにや、**複**雑になつてゐる。岸は**絶壁**になつてゐる處が多く、殊に兩半島にはなかのうみさまれてゐる中湖の東岸の如きは、絶壁の高さが二百メートル以上もある。中湖は深さが三百七十八メートル、此の湖中で一番深い處

沼

因

である。我が國の湖沼中此の湖より深いものは秋田縣の田澤湖だけである。

湖の水は東岸から奥入瀬川おいらせとなつて流れ出るのであるが、一年を通じて水位の變化は極めて少い。即ち水位の一番高い五月と一番低い一月との差は僅かに三十八センチメートルに過ぎない。これは主として周圍が山で、流れ込む川に大きいのがないのに原因してゐる。





賜

三十年ばかり前までは、此の湖には魚類が全く居なかつた。これは奥入瀬川を十町餘り下つた處に大きな瀧があつて、魚類のさかのぼる道を絶つてゐるからである。今日鱒ますの産地として世に知られるやうになつたのは、養魚經營の賜である。

第十二課

小さなねぢ ヤシントン  
提人 体

暗い箱の中にしまひ込まれてゐた小さな鐵のねぢが、不意にピンセツトにはさまれて、明るい處へ出された。ねぢは驚いてあたりを見廻したが、いろいろの物音が、いろいろの物の形がごたくと耳にはいり目にはいる

ばかりで、何が何やらさつぱりわからなかつた。しかしだんく、落着いて見ると、此處は時計屋の店であることがわかつた。自分の置かれたのは、仕事臺の上に乗つてゐる小さなふたガラスの中で、そばには小さな心棒や齒車はやぜんまいなどが並んでゐる。きりやねぢ廻しやピンセツトや小さな槌つちやさまざまの道具も、同じ臺の上に横たはつてゐる。周囲の壁やガラス戸棚には、いろいろな時計がたくさん並んでゐる。かちくと氣ぜはしいのは置時計で、かつたりくと大やうなのは柱時計である。



ねぢは、これ等の道具や時計をあれこれと見比べて、あれは何の役に立つのであらう、これはどんな處に置かれるのであらうなどと考へてゐる中に、ふと自分の身の上に考へ及んだ。

「自分は何といふ小さい情ない者であらう。あのいろいろの道具、たくさんの時計、形も大きさもそれぐ違つてはゐるが、どれを見ても自分よりは大きく、自分よりはえらさうである。一かどの役目を勤めて世間の役に立つのに、どれもこれも不足は無ささうである。唯自分だけが此のやうに小さくて、何の役にも

立ちさうにない。あゝ、何といふ情ない身の上であらう。

不意にばたくと音がして、小さな子どもが二人奥からかけ出して來た。男の子と女の子である。二人は其處らを見廻してゐたが、男の子はやがて仕事臺の上の物をあれこれといぢり始めた。女の子は唯じつと見まもつてゐたが、やがてかの小さなねぢを見附けて、

「まあ、かはい、ねぢ。」

男の子は指先でそれをつままうとしたが、餘り小さいのでつまめなかつた。二度、三度、やつとつまんだと思ふ



陰

と直に落してしまつた。子どもは思はず顔を見合はせ  
た。ねぢは仕事臺の脚あしの陰にころがつた。

此の時大きなせきばらひが聞えて、父の時計師がはい  
つて來た。時計師は

「此處で遊んではいけない。」

といひながら仕事臺の上を見て、出して置いたねぢの  
無いのに氣が附いた。

「ねぢが無い。誰だ、仕事臺の上をかき廻したのはあゝ  
いふねぢはもう無くなつて、あれ一つしか無いのだ。  
あれが無いと町長さんの懷くわい中時計が直せない。探せ、

探

探せ。」

ねぢは之を聞いて、飛上るやうにうれしかつた。それで  
は自分のやうな小さな者でも役に立つことがあるの  
かしらと、夢中になつて喜んだが、此のやうな處にころ  
げ落ちてしまつて、若し見附からなかつたらと、それが  
又心配になつて來た。

親子は總掛りて探し始めた。ねぢは「此處に居ます。」と叫  
びたくてたまらないが、口がきけない。三人はきんぐ  
探し廻つて見附からないので、がつかりした。ねぢもが  
つかりした。



其の時、今まで雲の中に居た太陽が顔を出したので、日光が店一ぱいにさし込んで来た。するとねぢが其の光線を受けてぴかりと光つた。仕事臺のそばに、ふさぎこんで下を見つめてゐた女の子がそれを見附けて、思はず「あら」と叫んだ。

父も喜んだ、子どもも喜んだ。しかも一番喜んだのはねぢであつた。

時計師は早速ピンセットでねぢをはさみ上げて、大事さうにもとのふたガラスの中へ入れた。さうして一つの懐中時計を出してそれをいぢつてゐたが、やがてピン

セットでねぢをはさんで機械の穴にさし込み、小さなねぢ廻してしつかりとしめた。

龍頭りゅうづつを廻すと、今まで死んだやうになつてゐた懐中時計が、忽ち愉快ゆさうにかちく〜と音を立て始めた。ねぢは、自分が此處に位置を占めたために、此の時計全體が再び活動することが出来たのだと思ふと、うれしくてうれしくてたまらなかつた。時計師は仕上げた時計をちよつと耳に當ててから、ガラス戸棚の中につり下げた。

一日おいて町長さんが来た。





「時計は直りましたか。」  
直りました。ねぢが一本いたんでおましたから、取りかへて置きました。工合の悪いのは其の爲でした。」  
「といつて渡した。ねぢは、  
自分もほんたうに役に立つてゐるのだ。」  
と心から満足した。

第十三課 國旗

今日一國家を形成する國々にして、國旗の制定せられざる所なし。國旗は實に國家を代表する標識にして、其の徽章色彩にはそれ〴〵深き意義あり。今我が國を始

章

雪

旭昇昇示



め主なる諸外國の國旗に就いて述べん。

雪白の地に紅の日の丸を画がける我が國の國旗は、最もよく我が國號にかなひ、皇威の發揚、國運の隆昌さながら旭日昇天の勢あるを思はしむ。更に思へば、白地は我が國民の純正潔白なる性質を示し、日の丸は熱烈燃ゆるが如き愛國の至誠を表すものともいふべきか。  
イギリスの國旗は、今日の形式を具ふるまでに幾多の變化を重ねたるものなり。元來イギリスは、イングランドスコットランドアイerland三國の合同して成れる國家にして、先づイングランドとスコットランドと合す



藍赤

るや、白地に赤十字の徽章ある前者の國旗と、藍地に斜  
白十字の徽章ある後者の國旗とを合して一旗となし、  
更にアイルランドの加はるに及び、白地に斜赤十字の  
徽章ある其の國旗を合はせて、遂に今日の如き形式を  
なすに至れり。國の成立。

現 星 獨

アメリカ合衆國の國旗は一定不變の部分と、變化を許  
されたる部分とより成る。即ち赤白合はせて十三條の  
横筋は、獨立當時の十三州を表すものにして、永久に變  
化することあらざれども、藍地中の星章は、常に州の數  
と一致せしむるを定めとす。現今は星章の數四十八個

なり。建國の歴史

平 縱

藍白赤三色を以て縦に染分けられたるは、フランスの  
國旗なり。此の三色は、自由平等博愛を表すものと稱せ  
らる。國民の理想

フランスの國旗が縦に三色を分ちたるに對して、黒赤

金の三色を横に染分けたるものはドイツの國旗なり。中

國旗の色彩が其の國の人種を表すものに、支那の國旗  
あり。即ち赤黄藍白黒の五色を横に並べたるものにて、  
赤は漢人、黄は滿洲人、藍は蒙古人、白は回疆人、黒は西藏  
人を代表するなり。國民の理想



示 仰

イタリヤの國旗は、緑白赤の三色を縦に染分け、中央の白地中に王家の紋章を表せり。これイタリヤ中興の主エンマヌエル王、國土統一の時、其の家の紋章の色なる白と赤とに、統一の成功を祈る希望の色として緑を加へ、更に王家の紋章を配したるものなり。 國成

かくの如く各國の國旗は、或は其の建國の歴史を暗示し、或は其の國民の理想信仰を表すものなれば、國民の之に對する尊敬は、即ち其の國家に對する忠愛の情の發露なり。故に我等は、自國の國旗を尊重すると同時に、諸外國の國旗に對しても、常に敬意を表せざるべから

ず。

シエクスピアハイギリス

第十四課 リヤ王物語

烈性短 易 后 與(与)

リヤ王はもう八十の坂を越えた。生れつき烈しい氣性の上に、年とともに老の氣短さが加はつて、ちよつとした事にも怒り易くなつてゐた。それに近來はめつきり元氣が衰へて、もう政務にもたへられなくなつて來た。王にはゴネリルリガンコーデリヤといふ三人の娘があつた。姉二人は既にさる貴族に嫁し、妹はかねてフランス王の后になることにきまつてゐた。

王は其の治めてゐるイギリスを三分して娘たちに與



許

へ、自分は百人の家來を連れて月代りに三人の娘の許に身を寄せ、餘生を安樂に送らうと決心した。

さて領地をゆづる日に、王は娘たちを面前に呼んで、

「今日はお前たちに一つ聞いてみたい事がある。お前たちのうちで誰が一番此の父を大事に思つてくれるか、わしはそれが知りたいのだ。先づ姉のゴネリルから言つてみよ。」

と尋ねた。

ゴネリルの答は如何にも言葉巧みであつた。

「私はもう何よりも、どんな寶よりも——ほんたうに

自分の命よりも父上を大事と存じます。昔からあつた孝子のどの人よりも厚い真心をもつて、父上にお仕へ致しませう。」

長女の言葉に満足した王は、地圖を指さしながら領地の三分の一を與へた。次にリガンは

「私も姉上と同じ心で、——ほんたうに姉上は私の思つてゐる通りをおつしやいました。唯少しおつしやり足りませぬばかりで、——私はあるとあらゆる身の樂しみを退けても、ひたすら父上を大事に致すのを此の上もない仕合はせと存じてをります。」



王はリガンにも三分の一を與へた。

コーデリヤは王が一番かはいがつてゐる娘であつた。王は満面に笑みをたゝへながら、今や遅しと其の答を待受けてゐる。コーデリヤは唯うつむいて、

「父上、私はどう申し上げてよいかわかりません。」

王は自分の耳を疑ふかのやうに目を見張つた。

「なに、どう申し上げてよいかわからぬ。それでは返事にならぬではないか。」

「私は胸にある事が十分に言へないのでございます。」

——唯私は子としての務を盡くしたいと思ふばかりでございます。」

りでございます。」

娘の言葉を物足りなく思つた王は、やゝせきこんで、

「どうしたのだ、コーデリヤ。何とか言方がありさうなものだ。」

「父上、私は唯ほんたうの事を申し上げてゐるのでございます。」

娘の答に失望した王は、例の烈しい氣性から、苦り切つて、

「お前にはもう何もやらぬぞ。永の勘當だ。」

と言渡した。さうして残りの領地を二分して、姉二人に



やつてしまつた。

家來の中にはしきりに王をなだめた者もあつたが、王の怒はいよ／＼つにつて、もうどうすることも出来ない。コーデリヤはす／＼と父の許を去らなければならなかつた。

リヤ王はフランス王を其の場に呼んで、コーデリヤを勘當したことを告げた。しかしフランス王は一部始終をよく／＼きゝたゞして、コーデリヤの簡単な答の中にも十分真心のこもつてゐるのを認め、本國にとまなひ歸つて約束の如く自分の后とした。

認

裂 準 整

リヤ王は百人の家來を連れて先づ姉娘ゴネリルの許に身を寄せた。ゴネリルは決して氣だてのやさしい女ではなかつた。二週間もたゞぬ中にもう王に無愛想な仕向をした。其の上王に百人の家來を五十人に減ずるやうにといつた。

王は胸も張裂けんばかりに怒り、早速馬にむちうつて次女リガンの許に走つた。ところがリガンは、まだ父上を迎へる準備が整つてゐないといふのを口實にして、すげなくも王を内に入れなかつた。

全領地を二分して與へてやつた二人の娘が、揃ひも揃



つてこれ程の不孝者であらうとは。王は男泣きに泣いた。

怒と失望と後悔とに身も魂もくだけ果てた王は、我にもあらず荒野の末にさまよひ出た。其の夜は風雨にともなつて雷鳴電光ものすさまじい夜であつた。王は二三の忠臣にかしづかれて、とある小屋に一夜を明かしたが、何時の間にかもう發狂してゐた。

父の身の上を案じながらフランスに行つたコーデリヤは、やがていたましい報知を得た。それは父が姉たちの爲に虐待きやくされてゐるといふことであつた。そこでコ

鳴 狂 待

請

ーデリヤは夫に請うて共々に家來を連れてイギリスに渡つた。

家來は荒野にさまよつてゐたりヤ王を見附けて、コーデリヤの許に連れて來た。フランス王の侍醫はとりあへず老王に藥を與へて靜かに眠らせた。

コーデリヤは眠つてゐる父の衰へ果てた姿をつくづくと見て、

「たとひ我が親でないにしても、此の白い髪や髭ひげを御覽になつたら、姉上もお氣の毒とお思ひになりさうなものだのに、——まあ、此のお體であのひどい嵐の

侍





中を——。  
 といひながら、よゝと泣きくづれた。  
 やがて眠から覺めた王は、幾分氣も静まつたのか、  
 「此處は何處だらう。一體わしは今までどうしてゐたのだらう。」  
 といつてあたりを見廻し、そばに居るコーデリヤを見て、

責

「これはどなたであらうな。笑つて下さるな、どうも娘のコーデリヤのやうに思はれてならぬが。」  
 コーデリヤは父の手を取つて泣きながら、  
 「其のコーデリヤでございます。」  
 「涙をこぼしてくれるのか。お前はわたしをうらんでゐるはずだが。」  
 「何でうらむわけがございませう。何でうらむわけがございませう。」  
 王は尚あらぬ言葉を口走つてはゐたが、其の言葉の端端にも、前非を悔い、自分を責めて娘にわびる眞心がこ



腸

もつてゐた。コーデリヤはそれを聞いて腸をちぎられるやうな思がした。

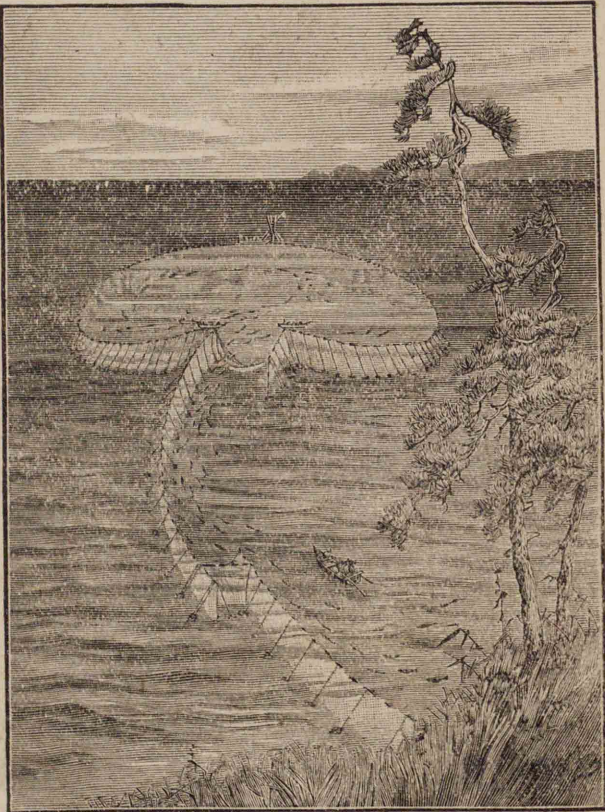
其の後老王はコーデリヤの孝養によつて餘生を安樂に送つたといふ。

第十五課 まぐる網

まぐるを取る方法はいろいろあるが、だいぼう網で取るほど勇壯なものはあるまい。

だいぼう網は身網と垣網と二つの部分から成つてゐて、非常に大きなものである。これを海中に張つた形はちやうど大きなひしやくに似てゐる。即ち水のはいる

網



處に當る部分が身網で、柄えに當る部分が垣網である。先づ岸近くまぐるの寄つて來る場所を選んで、海岸から沖の方

へ二三百間も長く垣網を張り、其の先へ身網を張る。潮に流されないうやうに、身網にも垣網にも土俵や石などが重りに附けてある。身網の外側や陸上の高い處に魚



揚

見やぐらが設けてあつて、漁夫が絶えずまぐろの來るのを見張つてゐる。

群をなして寄せて來たまぐろは、先づ垣網に驚き、之に沿うて沖へ逃げようとして身網の中へはいる。其の時魚見やぐらの上で旗を揚げて、まぐろの群が網にはいつたといふ合圖をすると、網口の近くに番をしてゐる漁夫が急いで網口をしめてしまふ。これでもう魚は逃出すことが出來ない。そこで數そのの船に分乗した漁夫が、えんやくと掛聲を掛けながら身網を一方からたぐつて行く。かうしてだんく網の中が狭められる

貫 狂

に隨つて、まぐろは水面に渦卷うずまきを起したり、背びれを水上に現したりして泳ぎ廻つてゐる。

網の中がいよく狭くなると、其の周圍を船で取巻いてしまふ。漁夫はめいく手に一ちやうづつの鈎かぎを持ち、狂ひ廻るまぐろを引つかけ、はねるはずみを利用して船中に引上げる。三四十貫時には百貫以上もある大まぐろがどたりくと船中へ投込まれる光景は、實に壯快の極みである。

船がまぐろで一ぱいになると、大れふ旗を風になびかせながら、えつさくと陸の方へ漕歸つて來る。漁夫の



顔は得意の色に輝いて、まるで凱旋がいてんの将士のやうに見える。

第十六課 鳴門

一

阿波あはと淡路あはぢのはざまなるとの海は、  
此處ぞ名に負ふ鳴門の潮路。  
八重の高潮かちどき揚げて、  
海の誇のあるところ。

二

山もとゞろに引潮たぎり、



圖廿二

たぎる引潮あら渦を巻き、  
巻いて流れて流れて巻いて、  
空にとびたつ、潮けむり。

三

裸島はだかしまより渦潮見れば、  
胸も波だち眼もくらむ。  
船頭勇まし、此の潮筋を  
落し漕ぎゆく、木の葉舟。

第十七課 間宮林藏

樺太からふとは大陸の地續なりや、又は離れ島なりや、世界の人





疑査

は久しく之を疑問としたりき。然るに其の實際を調査して此の疑問を解決したる人、遂に我が日本人の中より現れぬ。間宮林藏これなり。

今より百二十年ばかり前、即ち文化五年（一八四八年）の四月に、林藏は幕府の命によつて、松田傳十郎と共に樺太の海岸を探検せり。樺太が離れ島にして大陸の地續にあらざることは、此の探検によりて略知ることを得たれども、更によく之を確めんがために、同年七月林藏は單身にてまた樺太におもむけり。

先づ樺太の南端なる白主（しらぬし）といふ處に渡り、此處にて土

確

雇舟

宅

人を雇ひて従者となし、小舟（こぶね）に乗じていよく探検の途に上りぬ。それより一年ばかりの間、風波をしのぎ、飢寒と戦ひ、非常なる困難ををかして樺太の北端に近きナニヲーといふ處にたどり着きたり。これより北は波荒くして舟を進むべくもあらず、山を越えて東海岸に出でんとすれば、従者の土人等ゆくての危険を恐れて従ふことをがへんぜず、止むなく南方のノテトといふ處に引返し、酋長（しゅうちやう）コーニの宅に留りてしばらく時機の至るを待ちぬ。

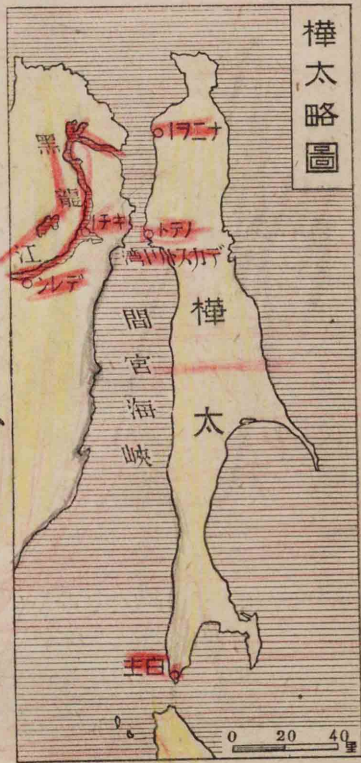
網をすき、舟を漕ぎ、漁業の手傳などして土人に親しみ、



さてさまぐの物語を聞くに、對岸の大陸に渡りて其の地の模様を探るは、かへつて目的を達するに便なることを知りぬ。たまぐコーニが交易のため大陸に渡らんとするに際し、林藏は好機至れりとひそかに喜びて、切に己をともなはんことを求む。コーニは容貌の異なる汝が彼の地に行かば、必ずや人に怪しまれなぶりものにせられて、或は命も危かるべし。とて、しきりに止むれども林藏きかず、遂に同行することに決せり。出發の日近づくや、林藏はこれまでの記録一切を取りまとめ、之を從者に渡して、いふやう、我若し彼の地にて

國十二

樺太略圖



死したりと聞かば、汝必ず之を自主に持歸りて日本の役所に差出すべし。と。

文化六年六月の末、コーニ、林藏等の一行八人は、小舟に乗じて今の間宮海峡を横ぎり、デカストリー灣の北に上陸したり。それより山を越え、河を下り、湖を渡りて黒龍江の河岸なるキチーに出づ。其の間、山にさしか、れば舟を引ききて之を越え、河湖に出づればまた舟を浮べて進む。夜は野宿すること少からず。木の枝を伐りて地



抱 懷 顧 叱

上に立て、上を木の皮にておほひ、八人一所にうづくま  
りて僅かに雨露をしのぐ。  
キチーにて土人の家に宿る。土人等林藏を珍しがりて  
之を他の家に連行き、大勢にて取圍みながら、或は抱き  
或は懷を探り、或は手足をもてあそびなどす。やがて酒  
食を出したれども、林藏は其の心をはかりかねて顧み  
ず。土人等怒りて林藏の頭を打ち、強ひて酒を飲ましめ  
んとす。折よく同行の樺太人來りて土人等を叱し、林藏  
を救ひ出しぬ。

翌日此の地を去り、河をさかのぼること五日、遂に目的

地なるデレンに着せり。デレンは各地の人々來り集り  
て交易をなす處なり。林藏の怪しみもてあそばるゝこ  
と、此處にては更に甚だしかりしが、かゝる中にありて  
も、彼は土地の事情を研究することを怠らざりき。  
コーニ等の交易は七日にして終りぬ。歸途一行は黒龍  
江を下りて河口に達し、海を航してノテトに歸れり。此  
處にて林藏はコーニ等に別れを告げ、同年九月の半ば、  
白主に歸着しぬ。

林藏が二回の探檢によりて、樺太は大陸の一部にあら  
ざることを明白となりしのみならず、此の地方の事情も



始めて我が國に知らるゝに至れり。

第十八課 法律

法律は國家といふ共同生活を秩序ありかつ幸福なものにするための規則であるから、いやしくも國民たる者は必ず之を守らなければならぬ。

法律を制定するには、政府又は貴衆兩院の何れかが其の案を作成して議會に提出する。政府から提出された案は先づ議會の一院で討議される。討議の形式は、普通第一讀會第二讀會第三讀會の三度の會議を経ることになつてゐる。即ち第一讀會で其の案を大體に調査し、

提 討

否

省

第二讀會で逐條に審議し、第三讀會で法律案全體の可否を議決する。かうして其の院で可決すれば、其の案を他院に移す。此處でも同様の形式で討議し、兩院の意見が一致すれば、最後に議決した議院の議長から國務大臣を経て奏上する。又貴衆兩院の何れかから提出された案は、他の一院のみで討議し、可決すれば同じ手續によつて奏上する。そこで天皇が之を裁可せられ、公布せしめられると、始めて法律が出来上るのである。法律の外に勅令、閣令、省令、府縣令等の命令がある。これ等の命令も國の規則であつて、廣い意味でいふ場合に



はやはり法律であるから、其の制定も出来る限り慎重な手續を經る。唯法律は必ず帝國議會の協賛を經なければならぬが、命令には其の事がない。

一國文化の程度は、其の國民が國法を守る精神の厚薄に依つて測ることが出来るといはれてゐる。我々は常に國法にしたがつて幸福な生活を營み、あはせて國の品位を高めることにつとめなければならぬ。

第十九課 釋迦

釋迦しゃかは今から凡そ二千五百年前、北インドのヒマラヤ山のふもとカピラバスト王國の太子として生れた。

釋迦は生れつき同情の念に厚く、何事も深く考へ込むたちであつた。或時、父王と共に城外に出て、農夫の働く様を見廻つたことがある。ぼろを着た農夫は玉のやうな汗をかいて田をすき起し、牛はつかれ果ててあへぎあへぎ働いてゐる。折から飛下りて來た鳥が鋏に傷つけられた蟲をついばんだ。木陰からじつと見てゐた彼は、しみじみと自分の身の上に思ひ比べて、農夫や牛の勞苦を思ひやると共に、蟲の運命をあはれんだ。彼はだんく物思に沈むやうになつた。それを見てひどく氣をもんだ父王は、彼に妃ひめを迎へ、目もまばゆい宮



與

殿に住まはせて、國政にも與らせようとした。しかし彼は城外に出る毎に、杖にすがるあはれな老人や、息もたえだえの病人、さては野邊に送られる死者をまのあたり見て、益、世のはかなさを感じた。

「人は何の爲に此の世に生れて來たのか。我々の行末はどうなるだらうか。」

こんな事を次から次へと考へては、遂に心の苦しみにたへられなくなつて、

賢

「此の上は聖賢を訪うて教を受ける外はない。」

と思ひ立つに至つた。

大日本國の光

父のいさめも妻のなげきも、此の決心をひるがへすことは出来なかつた。かくて彼は二十九歳の或夜、人知れず宮殿を出て修行の途に上つた。

師を求めてあちらこちらさまよつてゐるうちに、マガダ國の首府王舎城の附近に來た。かねて釋迦の徳をし たつてゐたマガダ國王は、修行を思ひ止らせようとして、自分の國をゆづらうとまで申し出たが、彼の決心はどうしても動かさなかつた。彼は更に其の邊の名高い學者を尋ね廻つて説を聽いたが、どれにも満足することが出来ない。彼は遂に

田中敬

山井



試

「もう人にはたよるまい。自分一人で修行をしよう。」と決心して、或静かな森へ行つた。さうして此處で父王の心盡くしから送られた五人の友と、六年の間種々の苦行を試みた。

次第にやせ衰へて、物にすがらなければ立てない程になつた時、彼はいくら苦行をしても更に効のないことを知つた。そこで彼は先づ近處の河に浴し、たま／＼其處にゐた少女のさ／＼げた牛乳を飲んで元氣を回復した。ところが此の新たな態度たに驚いた五人の友は、釋迦が全く修行を止めてしまつたものと思ひ、彼を捨てて立

濃静

悟

星

尊

去つた。

それから釋迦はブダガヤの綠色濃き木陰に静坐しておもむろに思をこらした。今度は程よく食物も取り、休息もした。さうして日夜次々に起つて來る心の迷をしりぞけて唯一筋に悟の道を求めた。

或時のことである。彼は夜もすがら静坐してひたすら思をこらしてゐると、やがて一點の明星がきらめいて、夜はほの／＼と明けそめた。其の刹那せつ、彼は迷の雲がかりりと晴れて、はつきりとまことの道を悟り得た。彼は此の心境の尊さに數日の間唯うつとりとしてゐたが、



胸

やがて此の尊い心境を世界の人々と共にせずにはおられぬといふ慈悲の心が胸中にみなぎりあふれた。



即

の前にひざまづかざるを得なかつた。彼等は釋迦の教を聽いて即座に弟子となつた。

釋迦は世を救ふ手始として先づかの五人の友をたづねた。かつて釋迦を見捨てた彼等も、其の慈悲圓滿の姿を見ては、思はず其

妻

迫 抗

續いて釋迦はマガダ國王をたづねてねんごろに道を説聞かせ、更にカピラバストに歸つて、父王妻子を始め國民を教化して故郷の恩に報いた。

今や釋迦は衆星の中の満月の如く國中から仰がれる身となつたが、中には彼をそねむあまり、反抗するばかりでなく、迫害を加へようとするものさへも出て來た。殊にデーバダタは、いとこの身でありながら、かねてから釋迦の名望をねたみ、幾度か彼を害しようとした。或時の如きは、釋迦が山の下にあるのを見附けて、上の方から大石をころがしたが、石は釋迦の足を傷つけただ



巡

けで、目的を果すことは出来なかつた。  
釋迦は八十歳の高年に及んでも、なほつゞれをまとひ  
飢うゑと戦ひつゝ、各地を巡つて道を傳へてゐたが、遂に病  
を得てクシナガラ附近の林中に留つた。危篤とくの報が傳  
はると、これまで教を受けた人々が四方から集つて別  
れを惜しんだ。いよく、臨終が近づいた時、釋迦は泣悲  
しんでゐる人たちに、

「私は行はうと思つたことを行ひ盡くし、語らうと思  
つたことを語り盡くした。これまで説いた教そのも  
のが私の命である。私のなくなつた後も、めいゝくが

諭

失

自嚴廻

廢

其の教をまじめに行ふ所に私は永遠に生きてをる。  
と諭して靜かに眼を閉ぢた。

第二十課 奈良

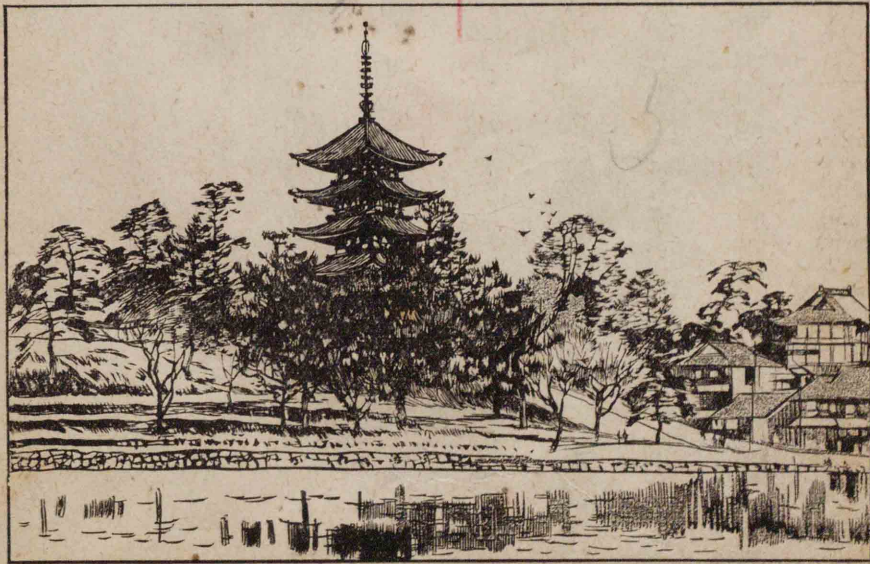
七代七十餘年の帝都として、咲く花のにはふが如しと  
誇りし奈良ならの都も、色移り香失せて年既に久しく、今は  
唯畿内きないの一都市として僅かに古の名残を留むるのみ。  
然れども春日かすがの社頭、朱あけの廻廊らうらう山の緑にはえて、森嚴自  
ら人の襟えりを正さしめ、東大寺の金堂は天空高くそびえ  
て、五丈三尺の大佛一千二百年の面影を残せり。興福寺  
は伽藍がらん半ば廢れたれど、尚三重五重の塔、猿澤さるさばの池水に



霞 能低

影をうつして南都第一の美  
觀たり。社寺の壯麗はしばら  
くおき、何の山、何の川、一木一  
草に至るまでも歴史あり古  
歌あり、人をして低回する能  
はざらしむ。

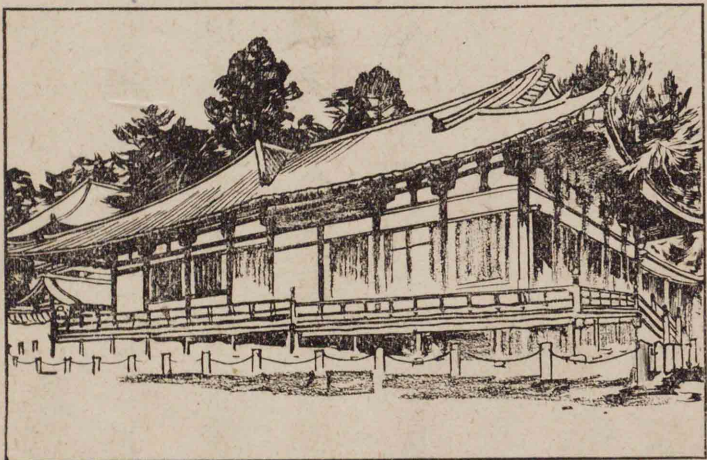
春は若草山の芝<sup>しば</sup>緑にもえた  
ち、三月堂・二月堂霞につま  
れてさながら夢の如く、秋は  
春日の社神さび<sup>たむけ</sup>手向山の紅



國十二

裏 井 岡 缺 哀 鹿

(廉)



北に大内裏の宮殿を仰ぎ、朱雀の大路南に走りて、南端

葉夕日にはゆる様殊に見所あり。人なつかしげに寄り  
來る鹿の、春はわけてもやさしく、  
秋より冬にかけて哀音しきりに  
人の眼をさますも、奈良には缺く  
べからざる風情なるべし。

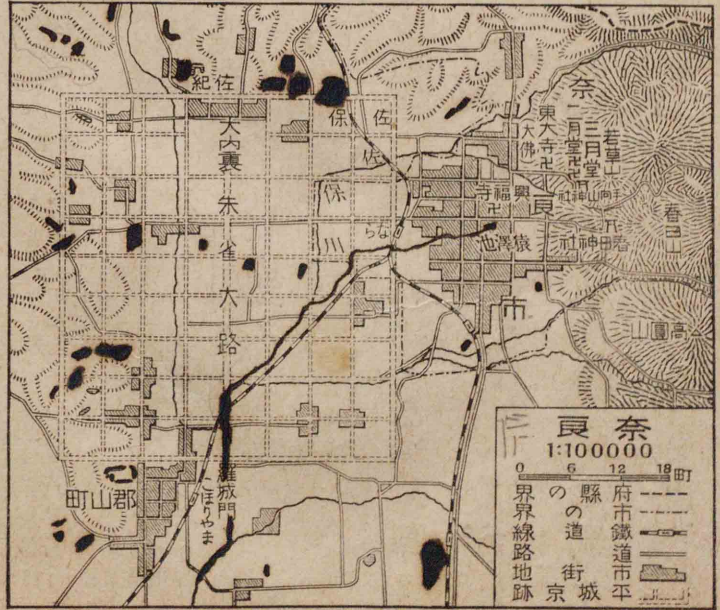
佐保佐紀の連岡に北を限り、春日  
高圓の山々を東に、矢田山生駒山  
を西にひかへて、東西四十町、南北  
四十五町、九條の條坊井然として、





郡

に羅城門をふまへたる古の奈良の都は、そもく如何に美しく、如何に盛なりしぞ。今若草山に登りて古京の跡を展望すれば、眼下に横たはる奈良市街の西、遠く連なる田園の間に東西に走る三筋の路は、北より數へて古の一條二條三條の大路の名残とす。大極殿の跡はるかに指點すべく、南の方郡山の町の東に羅城



回首

門の跡今も残れりといふ。そのかみ金殿玉樓相望みてうちつゞく都大路を、大宮人の櫻かざし紅葉かざして往來しけむ、今にして思へば唯一場の夢に過ぎず。更に首を回らして南を望めば、大和平野の盡くる處はるかに畝傍山耳成山、天の香久山の三山まゆの如く、其の南に一きは高く多武峯吉野山の山々連なるを見る。げにや、めぐらせる青垣山に、こもれる大和うるはしと歌ひしにそむかず。愛すべく美しき山野は、更に太古以來の歴史と結び、文學と結びて、感じよく、深きを覺ゆ。

第二十一課 青の洞門



頭

豊前の中津から南へ三里、激流岩をかむ山國川を右に見て、川沿の道をたどつて行くと、左手の山は次第に頭上にせまり、遂には路の前面に突立つて人のゆくてをさへぎつてしまふ。これからが世に恐しい青のくさり戸である。それは山國川に沿うて連なる屏風のやうな絶壁をたよりに、見るから危げな數町のかげはしを造つたものであるが、昔から之を渡らうとして水中に落ち、命を失つた者が幾百人あつたか知れない。享保の頃の事であつた。此の青のくさり戸にさしかゝる手前、路をさへぎつて立つ岩山に、毎日々々根氣よく

衣

のみを振るつて、餘念なく穴を掘つてゐる僧があつた。身には色目も見えぬ破れ衣をまとひ、日にやけ仕事にやつれて年の頃もよくわからぬくらゐであるが、きつと結んだ口もとには意志の強さが現れてゐる。僧は名を禪海ぜんかいといつてもと越後の人、諸國の靈場れいじやうを拜み巡つた末、たましく此の難處を通つて幾多のあはれな物語を耳にし、どうにか仕方はないものかと深く心をなやました。さていろくと思案したあげく、遂に心を決して、たとへ何十年かゝらばかゝれ、我が命のある限り、一身をさへぎつて此の岩山を掘抜き、萬人の爲に安



全な路を造つてやらうと、神佛に堅くちかつて此の仕事に着手したのであつた。

之を見た村人たちは、彼を氣違扱ひにして相手にもせず、唯物笑の種にしてゐた。子どもらは仕事をしてゐる老僧のまはりに集つて、「氣違よく」とはやし立て、中には古わらぢや小石を投げつける者さへあつた。しかし僧はふりかへりもせず、唯黙々<sup>もく</sup>としてのみを振るつてゐた。

其のうち誰言ふとなく、あれは山師坊主<sup>ほうず</sup>で、あのやうなまねをして、人をろうらくするのであらうといふう

はさが立つた。さうして陰に陽に仕事のじやまをする者も少くなかつた。しかし僧は唯黙々としてのみを振るつてゐた。

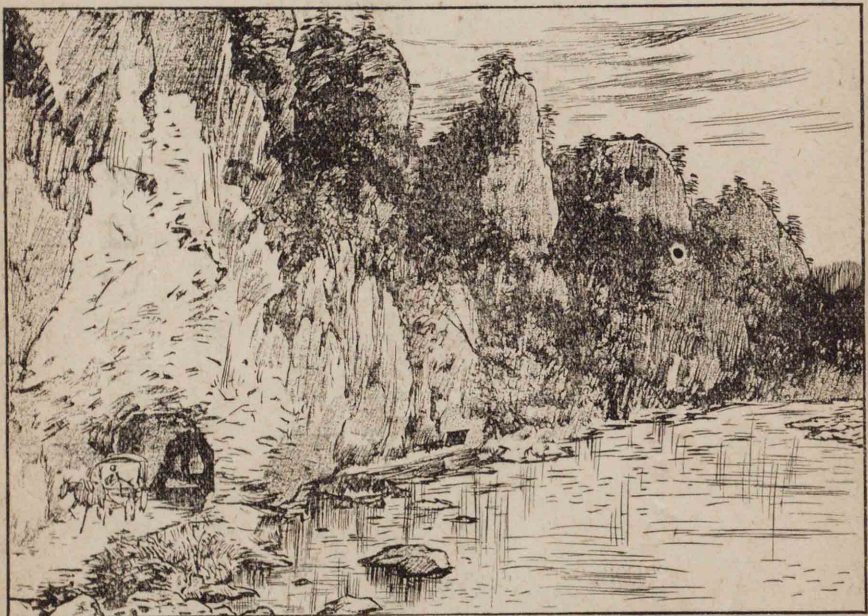
かくて又幾年かたつうちに、穴はだんく、奥行を加へて、既に何十間といふ深さに達した。

此の洞穴<sup>ほら</sup>と、十年一日の如く黙々としてのみの手を休めない僧の根氣とを見た村の人々は、今更のやうに驚いた。出来る氣づかひはないと見くびつてゐた岩山の掘抜も、これではどうにか出来さうである。一念こつた不斷の努力は恐しいものであると思ひつくと、此の見



る影もない老僧の姿が急に尊いものに見え出した。そこで人々はいつそ我々も出来るだけ此の仕事を助けて、一日も早く洞門を開通し、老僧の命のあるうちに其の志を遂げさせると共に、我々もあのくさり戸を渡る難儀ぎをのがれようではないかと相談して、其の方法をも取りきめた。

其の後は老僧と共に洞穴の中でのみを振るふ者もあり、費用を喜捨する者もあつて、仕事は大いにはかどつて来た。しかし人は物にうみ易い。かうして又幾年か過すうちに、村の人々は此の仕事にあきて来た。手傳をす



る者が一人へり二人へりして、はては又村人全體が此の老僧から離れるやうになつた。

けれども老僧は更にとんちやくちやくしない。彼の初一念は年と共に益、固く、時には夜半までも薄暗い燈を便りに、經文をとなへながら一心にのみを振るふこと



さへあつた。

老僧の終始一貫した根氣は、遂に村の人々を恥ぢさせ  
たものか、仕事を助ける者がまたぼつくと出来て來  
た。かうして、老僧が始めてのみを此の絶壁に下してか  
らちやうど三十年目に、彼が一生をさへげた大工事が  
みごとに出来上つた。洞門の長さは實に百餘間に及び、  
川に面した方には處々にあかり取りの窓さへうがつ  
てある。  
今では此の洞門を掘りひろげ、處々に手を加へて舊態  
を改めてはゐるが、一部は尚昔の面目を留めて、禪海一

急り岩をも廻す

生の苦心を永久に物語つてゐる。

第二十二課 トマス、エヂソン

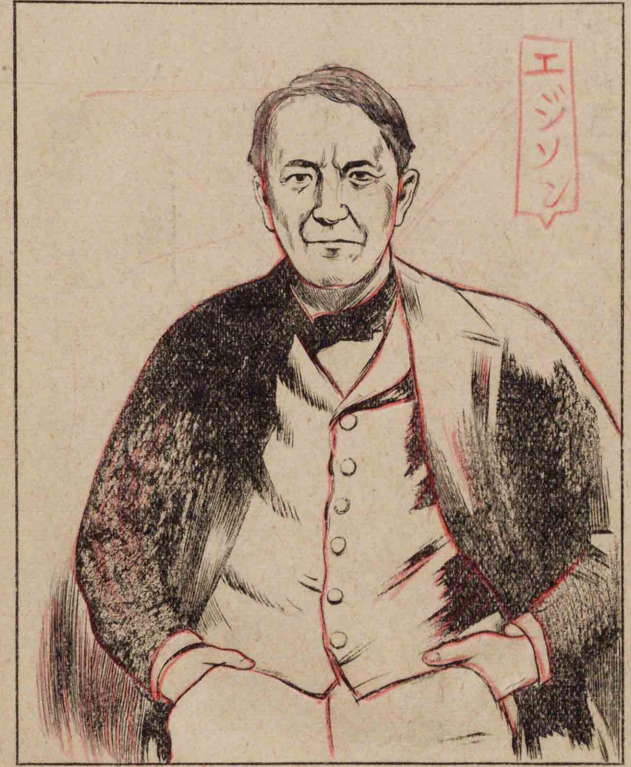
照 驗

電燈の發明せられたるは、今より凡そ百十餘年前のこ  
となり。當時は單に理化學の實驗用として使用せらる  
るに過ぎざりしが、次第に改良せられて、四五十年の後  
には燈臺などにすゑ附けらるゝに至りぬ。然れどもこ  
は今日のアーク燈に類するものにして、公園街路等の  
照服用としては適當なれども、室内に用ふるには、大仕  
掛にして光力強きに過ぎ、實用に適せず。これ等の缺點  
なき電燈の出現は、當時の人の最も希望する所なりき。



稀

かねて此の希望をみたさんと思ひおたるトマス、エヂソンは既に電話機に關する發明に成功したるを以て、



更に進んで新しき電燈の發明に従事したり。彼が稀代の天才はこゝにも遺憾なく發揮せられて、着々成功の域に進みしが、唯心に至りては彼の最も苦心したる所なりき。初め彼は紙に炭

徒

素を塗りて試みしが、思はしき結果を得ず。次いで白金其の他の金屬の針金を以て様々の實驗を重ねしが、これまた失敗に終りぬ。こゝにおいて再び炭素線の研究に没頭したれども、徒に多くの時日と金錢とを費したるに過ぎざりき。

机

或日のことなりき。エヂソンは例の如く實驗室に閉ぢこもりて研究に餘念なかりしが、ふと見れば机上に形珍しき一本の團扇あり。何心なく手に取りて眺めると、りし彼の眼は異様に輝きぬ。彼の眺め入りしは繪にあらず紙にあらず、實に團扇に用ひられたる竹なりしな



許

り。  
彼は直に竹を以て炭素線を作りて實驗せしに、豫想以上の好結果を得たり。こゝにおいて彼は人を世界の各地につかはして竹を採集せしめ、其のもたらせるものに就いて綿密に研究せしが、日本の竹最も適當なりしかば、専ら之によりて心を製出せり。しかして其の電球は忽ち世界に廣まりぬ。

エヂソンの發明せるは電話電燈電信電車活動寫眞蓄音機に關するものなど極めて多く、アメリカにて特許を得たるもののみにても其の數實に千餘に及ぶ。今日

蒸 革

文明の利器と稱せらるゝものにして、直接間接に彼の天才によらざるもの殆どなしといひて可なり。

第二十三課 電氣の世の中

二十五日午後一時から、學校の講堂で村崎工學博士の電氣の世の中と題する講演があつた。博士は先づ

現今における電氣の利用は實にめざましいものである。電車は次第に汽車の領分までも侵略し、尚進んで電氣機關車さへも用ひられるやうになりました。諸機械の原動力であつた人力又は蒸氣力もだんく電氣に變つて、工業界の一大革新をうながしてゐま



早

す。殊に近年は水力電氣の驚くべき發達にともなひ、電力は頗る廉價れんに供給されるので、石炭の火力による蒸氣力は、多くの場合之に敵することが出来なくなりました。そればかりでなく、石炭は早晚使ひ盡くされてしまふが、水力は無れん限といつてよい。』  
 といつて、急流や瀑布に富んでゐる我が國では、將來益、水力電氣の利用をはからなければならぬことを力説した。  
 次に博士は電氣の光に就いて述べた。

「エヂソンが炭素線の電燈を發明したのは五十年ば

消換

かり前のことであつたが、今では更に進んで光の色が太陽に似て、しかも比較的熱をとみなふことの少い電燈さへも發明されました。一體最も理想的な燈火は太陽の光のやうに明るくて、しかもほたるの光のやうに熱をとみなはないものであります。』  
 といひ、活動寫眞のフィルムがアーク燈の熱の爲に發火して、多くの死傷者を出した話などを附加へた。

「電信や電話の發明は其の當時實に全世界を驚かしたものでありますが、其の後無線電信が發明されて、陸上でも海上でも自由に消息を交換することが出



来るやうになりました。又最近無線電話が發明され  
ましたが、今やそれが盛に利用される機運となりま  
した。

アメリカにおいては此の無線電話の應用が極めて廣  
く、遠い處の音樂演説講話などを居ながら聞くことが  
出来ることや、進行中の汽車が無線電話機を備へ付け  
てゐたために危険を免れたことや、無線電話で子守歌  
を聞かせて赤ん坊を寝つかせてゐることなどの耳新  
しい話に、博士は満堂の會衆を喜ばせた。

最後に博士は電氣こんろ電氣アイロン電氣ストーブ

免

扇庭 呈 伺 引

扇風機など、家庭における電氣の利用に就いて興味あ  
る話をして壇を下つた。

第二十四課 舊師に呈す

拜啓。誠に御無沙汰に打過ぎ、申しわけもこれ  
なく候。當地に参りて以来、一度手紙を以て御  
様子御伺ひ申上げたしとは存じながら、なれ  
ぬこととて仕事に追はれ、一日々々と延引致  
し、今日に相成り申候。失禮の段御許し下され  
たく候。

本日突然上田君に出會ひ、久しぶりにて郷里



の様子をいろく承り申候。先生には何時も御壯健の由、何よりのことに御座候。私のことと御心にかけて下され、常に「小山はどうしてゐるだらうか」と仰せらるゝ由、いよく御なつかしく存じ奉り候。主人の使などにまゐる途中、小学校の前を通りては、郷里の學校のおもしろかりしことなど思ひ出し申候。私の勤め居り候家は呉服店にて、なかく忙しく御座候。参りし當座は何事もわからず、唯氣をもむのみにて、我ながら情なく存じ候ひ

忙

訓 定

しが、何事も忍耐が第一とのかねての御教訓に従ひ、一心に働き候ため、追々店の様子もわかり、お客様の扱方にもなれて、仕事に興味を覚ゆるやう相成り申候。毎晩賣上高の勘定を致す時など、仲間のうちにて計算は私が一番達者なりとて、何時もほめられ申候。これも全く先生方のおかげと深く感謝致居り候。此の上はいよく仕事に励み、一日も早く一人前の商人となりて、親に安心致させたしと存じ居り候。先づは御無沙汰の御わびかたぐ近



況御知らせ申上候。敬具。

二月二十日

小山文太郎

大井先生

第二十五課 港入

一

夢にのみ見し山川も、  
あけくれにしたひし家も、  
まのあたり近く迫りぬ。  
かもめ飛ぶ海をすべりて、  
船は今静かに歸る。

迫

懐

懐かしき故郷の港。

二

はやて吹くやみにたゞよひ、  
寄るべなき海にさすらひ、  
思出の深き船路や、  
つ、がなく今日しも果てて、

船は今静かに歸る、  
懐かしき故郷の港。

三

うるはしき眞玉・白玉、



載

にほひよき木の實、草の實、  
うづたかき積荷の中に  
海山の寶を載せて、  
船は今靜かに歸る、  
懐かしき故郷の港。

第二十六課 勝安芳と西郷隆盛

明治元年三月徳川慶喜征討の官軍は諸道より並び進んで、東海道先鋒は品川に、東山道先鋒は板橋に着いた。月の十五日を期して總攻撃を行ひ、一舉に江戸を乗つ取る手はずである。徳川方も事こゝに至つては、あくま

悟

策委涉

謀

でも戦ふ覺悟をきめて、ものすごい緊張を示してゐる。しかし市中の混亂は蜂の巢を突いたやうなさわざである。

慶喜から官軍に對する交渉の全權を委任せられてゐた舊幕府の陸軍總裁勝安芳は、かねてから百方畫策して時局の圓滿な解決を計つてゐた。しかし大勢は如何ともしがたく、危機は既に目前に迫つたので、安芳は三月十三日官軍の參謀西郷隆盛に會見を求めた。西郷は早速承知して、芝高輪の薩摩屋敷で會見したが、其の日要領は遂に得がたく、兩人は翌日の再會を期して別れ



確



た。  
 翌十四日の會見は、芝田町の薩摩屋敷で行はれた。安芳は今日こそ最後の確答を得ようと決心して、西郷をおとづれたのである。  
 屋敷の附近は、官軍の兵士がすき間もなく警衛してゐる。安芳がはいつて行かうとすると、門を守つてゐた兵士等

が

「それ勝が来た、勝が来た。」

とひしめきながら、一せいに銃劔を取直して行くてをさへぎつた。安芳は大音に

「西郷はどこに居る。」

と叫んだ。其の勢に吞まれて兵士等は思はず道を開いた。

一室に通されて待つてゐると、やがて西郷が出て来た。次の間には官軍の荒武者共がひかへて、何となく物々しい。しかし二人は互に信じ合つてゐる仲なので、話は



おだやかに運ばれる。安芳がいふ、

「官軍方の御意見はどのやうなものか存じませんが、拙者の考へる所では、今日日本の周囲には諸外國が様々の考を持つて見てをるので、うかくと兄弟垣にせめいでゐたら、日本全國にのしをつけてどこぞの國へやつてしまふやうな事にならぬとは決して申されませぬ。之に比べれば、幕臣の身としては如何がな申分ではあるが、徳川家の存亡などは言ふにも足らぬ小事でござります。」

相手は大きな眼でじつと安芳の顔を見つめながら、だ

まつて聽いてゐる。安芳は更に

「しかしたとへにも申す通り、一寸の蟲にも五分の魂。徳川侍のなまくら刀にも少しは切れる所がござりませう。官軍方の思召通り一押にはゆかぬかも知れませぬ。すると其のうちには又思の外な尻押なども現れて、事めんだうな筋合にならぬとも限りませぬ。拙者は、此の談判がよしどのやうに決着するにもせよ、さやうな事になれかしとは毛頭考へませぬが大勢は人力の如何ともしやうのないもので——」。

西郷はだまつてうなづいた。安芳は尚言葉を續けて、



推 仁 評 延

此の邊の事情をよくく御推察下されて、特別の御仁慈を以ておだやかに事のまとまるやう今一應御評議下さるることになりますれば、誠に日本國の幸でござります。又延いては徳川家及び江戸百萬の民の仕合はせ、これは申すまでもござりませぬ。何分今一應の御評議を推して御願ひ申す次第でござります。西郷はしばらくじつと考へてゐたが、

「よろしい。とにかく明日の總攻撃見合はせの一事だけは、拙者一命にかけて御引受け申します。其餘の事は拙者の一存にはまゐりませぬから、追つての沙

捧

汰をお待ち下さい。」

やがて安芳は西郷に見送られて門を出た。警衛の兵士等は、安芳の姿を見ると一時に押寄せて來たが、西郷が後に續いてゐるのを見て、一同恭しく捧げ銃の禮をした。安芳は自分の胸を指さして、

「次第によつては、或は君等の銃先にかゝつて死ぬかも知れぬ。よく此の胸を見覚えておいてくれ。」

といひながら、西郷と顔を見合はせてにつこり笑つた。西郷は軍令を出して翌日の進軍を中止させた。さうして直に静岡の大總督府にはせつけて議をまとめ、更に



京都に上つて勅裁を仰ぎ、とうく徳川方の願意をとほさせた。安芳が一命をかけた努力と、西郷の果斷によつて、江戸の市民も徳川家もわざはひを免れて、維新の大事業もとゞこほりなく成し遂げられるやうになつた。

第二十七課 我が國民性の長所短所

我が國が世界無比の國體を有し、三千年の光輝ある歴史を展開し來つて、今や世界五大國の一に數へられるやうになつたのは、主として我々國民にそれだけすぐれた素質があつたからである。君と親とに眞心を捧げ

冠 隨 據 然

盡くして仕へる忠孝の美風が世界に冠たることは、今更いふまでもない。忠孝は實に我が國民性の根本をなすもので、之に附隨して幾多の良性美德が發達した。東海の島に據つた日本は、國家を建設する上に頗る有利であつた。四周の海が天然の城壁となつて、容易に外敵のうかぶふことを許さないから、國家の存立を危くし、國民の生活をおびやかすやうな危機は絶無であり、國內はおほむね平和であつた。隨つて國民は國の誇を傷つけられたことがなく、又其の誇を永久に持續しようとする心掛けも出來て、いざといへば、舉國一致國難



系

に當る氣風を生じた。萬世一系の皇室を中心として團  
 結した國民は、かくていよく、結束を固くし、熱烈な愛  
 國心を養成した。其の上我が國の美しい風景や温和な  
 氣候は、自ら國民の性質を穩健をんならしめ、自然美を愛好  
 するやさしい性情を育成するのに與つて力があつた。  
 しかし此の事情は一面に國民の短所をもなしてゐる。  
 狭い島國に育ち、生活の安易な樂土に平和を樂しんで  
 ゐた我が國民は、とかく引込み思案におちいり易く、奮  
 闘努力の精神に乏しく、遊惰安逸遊惰安逸に流れるかたむきが  
 ある。温和な氣候や美しい風景は、人の心をやさしくし、

磨

誤容

優美にはするが雄大豪壯がうの氣風を養成するには適し  
 ない。殊に徳川幕府二百餘年の鎖國は、國民をして海外  
 に發展する意氣を消磨せしめ、徒に此の小天地を理想  
 郷と觀じて、世界の大勢を知らぬ國民とならしめた。其  
 の結果今日も尚國民は眞の社交を解せず、人を信じ人  
 を容れる度量に乏しい。そこで海外に移住しても外國  
 人から思ひ掛けぬ誤解を受けて排斥はいせきされるやうなこ  
 とも起つて來る。すべて日本人の短所として、性質が小  
 さく狭く出來たきらひがある。其の原因はいろく、あ  
 らうが、昔から此の島國で荒い浮世を知らずに過して



掃

來たことが、其の主たるものであらう。今日我が國が列強の間に立つて世界的の地歩を占めた以上、かういふ短所はやがて我が國民から消去るであらうが、出来る限り早く之を一掃することは我々の務ではあるまいか。

支那印度の文明を入れ、更に西洋の文明を入れて長足の進歩を成し遂げた日本國民は、賢明な機敏な國民である。他國の文明を消化して、之を巧みに自國のものとすることは、實に我が國民性の一大長所である。しかし此の半面にもまた短所がうかゞはれないであらうか。

創

侮

脱

潔

自分で思ふまゝに造り出す創造力は、十分に發揮せられたことがなく、昔から殆ど摸倣のみを事として來た觀がある。習性となつては、遂に日本人には獨創力がな

いであらうと自らも輕んじ、外國人からも侮られる。しかし摸倣はやがて創造の過程でなくてはならぬ。我々は何時かは摸倣の域を脱して十分に獨創力を發揮し、世界文明の上に大いに貢獻したいものである。

我が國民には潔いこと、あつさりしたことを好む風がある。櫻の花の一時に咲き一時に散る風情を喜ぶのがそれであり、古の武士が玉とくだける討死を無上の名



恥

省

譽としたのがそれである。日本人ほどあつさりした色  
 や味はひを好むものはあるまい。あつさりしたこと、潔  
 いことを好む我が國民は、其の長所として廉恥れんを貴び、  
 潔白を重んずる美德を發揮してゐる。しかし其の半面  
 には、物にあき易く、あきらめ易い性情がひそんでほ  
 ないか。堅忍不拔あくまでも初一念を通すねばり強さ  
 が缺けてはゐないか。こゝにもまた我々の反省すべき  
 短所があるやうである。

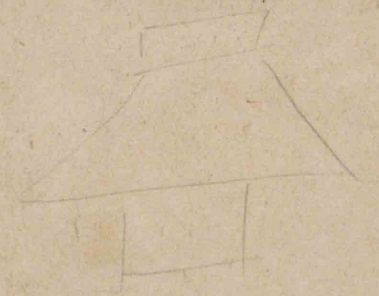
我が國民の長所短所を數へたならば、まだ外にもいろ  
 いろあらう。我々は常に其の長所を知つて、之を十分に

國十二

國十二

補

發揮すると共に、又常に其の短所に注意し、之を補つて  
 大國民たるにそむかぬりつばな國民とならねばなら  
 ぬ。



論  
 文

尋常國語讀本卷十二終







Ed. I. Dow



歐松

Ed. I. Dow

得六

Ed. I. Dow



Ed. I. Dow

Ed. I. Dow



嘉年華